

日中経済関係の構造的変容と諸問題

～日中「加工食品モジュール」論の視角から～

高橋 五郎

私のテーマはここにありますが、構造的変容と諸課題と銘打ってありますが、いまのお二方の先生は、非常にスケールの大きいお話をされました。私の話しは蟻のような小さな話です。従って、日本にも蟻族がいるとお感じになるかもしれませんが、これが私の研究分野で、しょうがないので我慢してください。

サブタイトルで「加工食品モジュール論」と書いてありますが、普通、モジュールというと、皆さんご存知かと思いますが、例えばパソコンとかあるいは自動車部品ですとか、精密機械とか、そういう部品の組み立てが国際間を超えて行き来している場合を指して言うことが多いです。私はこれを食品分野に応用できないかと思い、いろいろとデータを洗ってみました。今日はその一端をお話したいと思っています。

最初にこちらをみていただきたいと思っています。これはよく目にするデータなのですが、日本の財務省の貿易統計から作ったものです。2003、2008、2013年、5年おきに作ってみました。0から上にいきますと、日本の競争力が対中国で強いという意味です。マイナスになりますと逆に日本が弱いということになります。2008年、このころはリーマンショックが起きてさまざまな影響があった年ですので、ちょっと数字を割り引いて考えなければなりませんが、2008年をみますと、原料別製品というのがありますが、これは様々な製品を合わせたものです。続いて化学・機械・輸

送、これには自動車も入りますが、この3つはやや日本が有利でした。それ以外、特に私の専門分野である、食品あるいは農産物は、日本は中国に対して競争力が低いということを示しています。雑貨も大変低いですね。様々な雑貨を日本は輸入しておりますけども、これも弱いです。こういう状況が2008年になっても基本的に変わりません。

そして5年後の2013年になりますと若干、変わってきます。それまで競争力が強かったものも、完全にと行っていいのですが、中国に負けてしまう。化学製品だけはなんとか維持していますけど、これを除きますと、全面的に敗北と行ってよろしいです。ただし、この際考慮しなければならないことはこの円相場です。ご存知のとおり2010年代以降、大きな円高が進んだ訳です。2003年の場合、年平均で1ドル116円。それから年々5年おきにこんなに高くなって行きました。2013年は80円、70円台後半になりました。こういう具合に急速に円高が進みましたので、当然、日本の商品の対中競争力は落ちていくということになるわけです。これはやむを得ません。昨今は円安になっていますが、先行きどうなっていくのか見なければなりません。

この表をみていただいて、これから何をとお話するのかということをお話しておきたいと思っています。いまご覧いただいた図からは、日本の対中国競争力で大きな変化は確認できません。むしろあの図から見ると下がって

いる。しかしこの間の急激な円高を考慮すると、日本の対中競争力は実質的に向上していると私は思っています。仮に円相場、対ドル、対人民元相場が変化すると当然、貿易にも影響してきますので、今度は実質的な為替レートをみた上で比較しなければなりません、いまはでやめておきます。

食品総合、先ほどみて頂いた青果物、野菜、果物ですが、こういうものは-0.8で可能性をみる限り、日本の対中競争力の優位な性を確認することはほとんどできません。この点は学界や一般の方も同様、日本の農産物、食品の対中競争力は弱いというのが一般的な認識で、常識と言っても良いくらいです。

しかし、そうなのか、というのが私の一つの仮説みたいなもので、こうした見方は不十分ではないかと思っています。ということはどういうことかと言いますと、この農産物、あるいは食品の分野におきましても日本は結構、強いよということを見ていきたいわけです。そこで以下では主要産業別交易統計の長期推移と二番目には日中経済関係の構造変化をみる一環として、いま取り上げております食品の一工程、HSコード1ケタ、これは何かともうしますと、食品は原材料から加工し出荷に至るまで、様々な加工のプロセスがあります。この1ケタというのは畑からとれたままの農産物というように考えていただいて結構です。

そのようなコード1ケタにつきまして日中間と中国に香港を加えた場合の競争指数をみていきたいと思えます。そしてより詳細に同5ケタについても同じような見方を見ていきます。5ケタというのは加工度が変わってまいります。例えば醤油とかみそとか、醤油の原料は大豆とか塩ですが、大豆と塩を混ぜて、醤油ができるわけではありません。加工をします。混ぜて、寝かせて、発酵させて、そうしたプロセスを経てはじめて醤油ができるわけですが、そういう桁数が増えていく一つの

形式を示しています。5ケタはかなり高い加工度とと思ってください。この5ケタについて、日本そして香港を加えた中国という二つの指標を作って、そして現状がどうなっているのかということ見るのが、私のいまの研究で、この部分をわたしは加工食品モジュールと称しているわけです。

これを把握することを通じて、日中間に流通している加工食品における細かな実態を見ていこうというのです。最後に加工食品モジュールパターンの変化、どういうパターンがあるのか、それを見ていきます。そして最近OECDが公表している付加価値広域イニシアティブ、これはどういうことかと言いますと、付加価値で貿易のながれを見ていく。名目的な貿易金額ではない、実質的にどの国で価値が生産され、それがどの国に行って、最終的にどの国に行くのかということ、その国でできた付加価値見るというものです。この分野の研究は申さんが一つの専門分野なのですが、最近こうしたながれでみると、本当の貿易の流れは分からないという意見になってきました。おそらくそういう方向へ目が向いて行くのだろうと思います。

これは、品目ごとに1ケタごとの対中交易条件のこの十数年間の変化をみたものですが、総合では2005年が100ですが、傾向的にはずっと上っています。日本の統計によれば対中交易条件はそんなに悪くはないです。しかし食品はどうかという悪くはないです。最近になって急速にダウンしていますが、少なくとも財務省の統計をみる限りは全く日本が敗北しているようなことはないですね。なぜそのような違いが出てくるのかということは、統計の数字の使いどころによって変わってきて、そういう意味では、こういう数字の公表のしかたによって若干の局面が変わってくる。現象が変わってくるということが言えます。そこでですね、さきほど申しましたような、1ケタの食品です。この数字は

お手元にありますので見えなかったらご覧になっていただきたいと思いますが、これ以外にもたくさんの品目で日中あるいは国際的な貿易が行われていますが、私はこの分野だけを取り上げて比較しています。例えば、生きている動物についての取引、あるいは加工品を見ていったところ、まず合計は日本はたしかに1995年の場合で、中国からの輸入に対する、日本の輸出はわずか1.7%できわめて低いです。しかしそこに香港を足すと10%も上がります。香港は人口が800万人ですからそれほどものは食べないのです。どこへいくかということ、中国本土へ流れていくということです。こういうことなので、それで香港を足しています。そうしますと10%あがります。そして黄色い部分ですが、これは何かと言いますと、例えば製粉製品あるいはでんぷんとかは、中国だけでもまあ輸入している半分ぐらいは輸出しています。その他の食品の場合は、むしろ日本の方が1.3倍ぐらい輸出している。香港を加えると一層それが増えていきまして、15.4とか1.99、約2倍ぐらい日本の方が輸出が多いということになります。ただし全体的にみますと、食品表で示す食品の品目では中国が勝っていることは言うまでもありません。

しかし2010年になっていきますと、それはだんだんと変わってきました、わずか5年ですが、2010年になりますとこんなに変化していきます。黄色い部分が大きく変化したところになります。中国だけとの貿易をみても、0.017つまり1.7%から3.3%に増えており、3倍になります。香港を加えますと、16.3%にあがります。香港の人口は増えていません。従って、増えた分も加えて香港から中国へ行っている。あるいは香港が輸入したものがすべて中国へ行くとは限りませんが、相当な部分が中国へ行っていると計算しますと、これはやはり日本の対中食品貿易の競争力がすこし上がっている。とりわけどうい

ものが上がっているのかというのが、これが私が注目したおい部分なのです。

そこでこういうものを作ってみました。日本から中国+香港への輸出と輸入のHS5ケタです。5ケタというのは品目の桁数のことをいいます。これを農産物、食品だけにしぼって取り上げて整理したものです。これを作るのに1月以上かかりました。多分この表を作ったのは日本で私が最初です。他にはありません。従ってですね、これは一つの良い参考になると思いますので、ご覧になって頂きたいのです。この表で水色の所があります。水色は実は日本が勝っているものです。農産物の中でも、つまり5ケタ、つまり加工度が高まっていると日本は勝つという見通しを示しています。第一次産品ではまあ、ほぼ負けま

す。ところが加工していくと、そこへ日本の食品加工技術が加わって、付加価値が高まってきます。それによって貿易構造、対中の貿易競争力が高まっていきまして、そしてむしろ逆転して、ということはこの表は物語っています。

なぜ、こういう現象が起きるのかということ、食品は加工化がどんどん進んでいまして、私たちが口にする食品のほとんどが実は加工済みの食品ですね。家庭で料理されたり、あるいは奥さまが調理される時はおそらく、スーパーから野菜を買ってきて、それを加工されて愛する旦那さまにお食べになって頂く、ということもありますけど、一人暮らしとかですね、共稼ぎの奥さんですとか、今日はちょっとめんどうくさいなという奥さんはおそらく、スーパーのお惣菜を買ってきたり、あるいは加工されているものを買う。そしてそれをちょっとチンして、はい料理したわよ、なんて言って出すわけなんですね。お父さんはご存知でしょうけれど。そういう食べ物のスタイルが増えていきます。したがって私の予想では、食品に関しては加工度が高まっていく食品については日中の貿易は均衡している、

あるいは逆転していく、こういう仮説を持っていて、それを長い目で見ていこうかと思っている次第です。

そこで私の仮説はいま申しましたように、貿易競争力は不均衡から均衡化へ変わって行く、これが私の言う日中経済構造の変容の一側面です。従来はですね、一次産品の貿易をする、あるいは加工度が低い貿易をする段階では、資源のたくさんある国、あるいは労働力の安い国、あるいは何らかの有利な経済的要因を持つ国が勝つんですね。ところが加工度が高まっていくと、加工度には高い先端技術が伴っていきますから、技術優勢が今度は大変大事になっていきます。技術に優位性が出ていき、それが発揮された商品が増えていくことによって、こうなっていくのではないかということグラフで申しますと、現在、一次産品は中国では黒字です。上が黒字、下が中国の黒字としますと、一次産品、二次産品、つまり二ケタですね、加工度が低いものは中国が強い。ところがだんだん加工度が高まっていきますと、先ほどの表でご覧になって頂いたように、競争力は均衡していく。そして5ケタ、あるいはそれ以上の加工が進んでいけば、おそらく均衡が一般化して行き、日本の食品産業が勝っていく可能性があるということ私を仮説としたい。なんとか統計データを使って論証していきたいなど。私は大学時代からそろばんが得意でした。私の先生はですねゼミに入った最初の日に統計の説明をしてくれました。図書館へ連れて行って、この統計、あの統計、中国の統計、アメリカの統計、日本の統計はここにずっとある。それをどうやって見るのか、それを最初にしてくれました。「高橋君、これからはたまごんをやらなければならないよ」と。たまごんというのは珠算です。いまみたいに計算機はないですから、みんな珠算です。数字を足して自分で作ったものですね。そういうことがあったが為に、どうも癖が抜けなくて、先ほど

のような表も作ってしまいます。そして私は珠算三級です。いま使いませんけれども。こういうような数字を使いながら物事を考えてみなさいよというのを教わったのが運のつきでして、いま、この数字を眺めているのが半ば趣味になります。そうした趣味を使いながら、蟻族になって、コツコツとやります。私の友人からは「高橋さんよくこんなことやりますねと、そんな暇でもないのに」とよく言われますがしょうがないですね、それは。

以上は一つの中間的な結論ですが加工度が高まるほどに日本の対中食品の輸出額は増加、すなわち競争指数1を超えるか、つまり有利になるのか、あるいは0.5、かなり日本の力が接近して、そういうものが出てくる。そこでさらに香港向け輸出を計算すると増加は一層顕著になる。急速な円高が増加速度を抑制したので、今後円安が定着すれば日本産加工食品の対中輸出はさらに増加の可能性が大きいと思います。さらに中国では日系のたくさん食品会社がありますので、輸出と現地生産の加工度の高い食品を加えると、日本の食品加工産業はけして悲嘆するような状況では無いと思います。

そこで高度加工食品の貿易累計と進化する事例から加工食品モジュールの他の実態をまず見たいと思います。そして最近OECDが公表した付加価値イニシアティブですね、これによって財・サービス貿易の実態研究に新しい道を開くことを例示して終わりたいと思います。

それで具体的にはさきほど1、2、3、4、5ケタと言いましたが、どういうものがこれに当てはまるのかということで見ますと、いくつかのパターンに分かれます。生食野菜がパターンⅠ、パターンⅡが一次加工食材の輸入、乾燥野菜、冷凍野菜、カット野菜、ペースト、塩蔵野菜は漬物です。パターンⅢは二次加工食材で、例えば味付け鶏肉たくさん輸入しています、手羽先とか、味付け卵とか練り物

など、日本はたくさんあります。パターンⅣは多次加工食材、これが私のいうモジュール加工食品です。具体的に言いますと野菜エキス、ポークエキス等です。この実態はよくわかりません。

これを見ていくと、日本の場合は中国から生鮮青果物を輸入して、国内で加工してさらに中国へ輸出する。中国では一次加工食材を輸入して、それを国内で二次加工してそれを日本へ向けて輸出、最終消費地である日本へ輸出します。

具体的に申しますと、何も加工していないものはパターンⅠで、1ケタです。無加工です。真空タマネギですとか、日本はこうしたものをたくさん輸入しています。パターンⅡは乾燥白菜、乾燥ネギなどでこれは一次加工です。乾燥という一次加工です。パターンⅡの使用例は例えばケチャップです。これはカゴメの例ですが、カゴメでは原産地を公表しているので分かります。これは味の素の八宝菜です。中国からの一次産品を使ってこうした製品を作っています。こういうものはたくさんあります。例えば、味の素なのですが、お弁当サラダというものはほとんどが中国で、パセリだけオーストラリアです。これは典型的に一次産品、つまり無加工のものを輸入して日本で加工する。これは原始的な加工品です。パターンⅢはこういうものです。いま吉野屋が牛丼を280円で売り出しましたが、実は牛丼だけではなく、つくね丼つまり鳥ですね、これも280円です。多くのものは中国からやってきます。つくね丼、焼鳥つくね皿の鶏肉は味付けしたものを輸入しています。これがパターンⅢですね。それ以外にもたくさんあります。日清のカップヌードルでは味付け豚肉は中国から輸入しています。カップヌードルでは未加工のものと加工品のものが両方輸入されています。パターンⅣ、これは最終的な加工度が高い、ケタ数で言うと、4、5ケタになります。これは味の素のコンソメで

す。そのうち野菜のエキスは日本、中国、オランダからの原料なり加工品を使って、それでコンソメを作っている。中国からも野菜エキスを買っている。なんのものが分かりませんが、野菜エキスの中に、味付けされ、あるいは調味料あるいは添加物が入っていますが、現在の日本の食品表示法ではそこまで書く必要はないです。このように具体的に流通しているのが食品関係の1、2、3、4、5ケタという商品の具体的な内容です。これはカップ麺ですが、チャーシューは味付きですね、ポークエキス、これも味付きですね。これをまとめますと、中国で加工された食品もたくさんあります。日系企業もたくさんの加工企業もあります。中国企業も加工をします。加工をする際の原料は中国産とは限りません。中国で作られる食品の原料はアメリカあるいはタイから輸入する、ラオスから香港経由で入る。そして中国で加工されて日本へ輸入される場合には、中国から輸入、中国製造となります。今度スーパーへ行ったら、加工品の裏側をちょっとご覧担ってみてください。製造は中国となっています。しかしそれはあくまでも製造です。加工品がどこで作られたのかは書いてあるものは無いです。書く必要がないですから。

それらを見ていくと、こうではないかと思えます。中国で作る餃子、餃子はたくさん輸入していますね。餃子の具にはネギ、白菜、鶏肉、豚肉とかあるいはニンニクとかそういうものが入っています。それらを分解していくと多分こうなっていくと思います。その輸入する場合の加工食材は、例えばアメリカからは三次加工食品、タイからは第一次産品、ラオスからは一次産品の香港加工で入ってくる、そういうものが最終的に中国で加工されて日本にはいつてきますので、日本ではこれは全部中国産だと思ってしまう。ですがそういうものは少ないです。最近ですね、食品問題がまたにぎやかですね。安全の問題が。わ

たしも週刊文春、アエラ本、夕刊フジ、日刊ゲンダイなどの取材を受けています。記者のほとんどがこういう事実を知りません。だから中国だけが危険だと。私に言わせればそうじゃない。中国が輸入している食材を生産しているところがどこか、そしてそれは安全かということであれば、食品の安全問題を見たことになりませんよ。従って私自身は食品の安全性という、すぐに中国と言われるのですが、けっしてそうではない。その裏にある貿易構造を見ないと実態はわかりませんよ。そしてその実態は現段階の資料では分からないということになります。現段階で作っている国際的な統計、日本の統計、あるいは中国の統計では分からないです。こういう状況なのですが、中国だけが危険ですよ私は思わない。むしろ日本の方が危険かもしれないと思っています。

最後に、冒頭でも申しました、OECDが開発した付加価値貿易イニシアティブ、TiVAと言いますが、今年の5月に2009年までの確定値を公表しました。これはインターネットで見ることができます。どういうものかと言いますと、物やサービスが国境を超えるたびに、その総フロー（金額）を掲載して貿易収支としてきた計算、これがいままでの貿易収支です。例えば対中輸出が黒だ、赤だとか、アメリカに対する貿易収支が黒だとか、アメリカは赤だとか、すべてこの計算方式です。ところがOECDはこれじゃあ、実態がよく見えないということで、輸出される物やサービス原産国の付加価値として計算する、すべてです。原産地レベルで計算する。そして例えば中国から輸入された物のうち、日本で作られたものは何%か、あるいは日本は、中国へ輸出する商品のうち何らかの原料をアフリカから輸入している。そうすると、アフリカで作られた付加価値は何%、という具合に遡っていったら、付加価値レベルで貿易の実態を見ていこうというのがTiVAです。

TiVAがもう少しデータが正確になると、より日中の経済関係はもちろん、国際的に正確な価値の貿易が見えてくるということです。私はこれに期待しています。そうするとこういうデータが食品分野にも出てきますと、本当に中国から輸入しているもの、そのうち中国で作ったものが何%なのか明瞭にわかります。今の段階ではできません。しかし今後、こういう見方が出てくると思われますので、こういう見方に伴うデータ、あるいは研究というものが新しい視角として出てくるのではないかと思います。例えば一例を申しますと、これは下の方は従来の金額表示による貿易です。例えば、日本は中国に対して20.3%、全体を100%とすると、20.3%中国に輸出しています。アメリカに対しては16.58%です。中国は日本に対して8.7%、アメリカに対して22.58%。これは従来形式の表示です。

ところがTiVAによりますと、変わってきます。日本は中国に対して、20.31が14.01%、アメリカに対しては16.58が21.33%に増えます。これはどういうことかという、この差ですね。日本が中国に輸出していた物のうち、中国経由でアメリカに行くということです。そのデータ、数字がちょっと見えてきたということですね。三角貿易はある程度言われていましたが、付加価値レベルで三角貿易の実態は分かりませんでした。これが、このTiVAの数字を用いることによって、実態が見えてくる。

これを食品貿易に応用したいというのが私のテーマであります。そこでですね、まあこれ以上のデータは実はないのですが、参考文献だけつけておきます。いまの段階で私がこうしたTiVAで分析して研究している論文の中で一番良いのは、この[4]です、しかしこれはまだワーキングペーパーで論文とは言えませんけども、World Bank Policy Research Working PaperでOlivier

Cattaneo が書いた 2013 年の新しいペーパーです。これをみると私の話したことのもっと正確な詳しいことが分かりますので、お時間あればご覧になって下さい。あとは [1]、[2]、[3] は正直申しましてあまり参考になりません。3 つの中で一番参考になるのは [2] なのですが、これはまだ論文になっていないので、残念ながらお見せすることはできません。以上です。ありがとうございます。